

三カ月たってからのことである。驚いたことにこの長は関東軍の津森参謀であった。今までのどん底の環境に比べ、参謀肩章を付けた良か男の「気は優しく力持ち」を地でゆく中佐なのであった。「君は現役か？」なんて言われたが現役には違いない、二十を少し過ぎたくらいなのだから。「自分は喜多大将の参謀だったんだ」とも言っていた。そんな人が我々みたいな兵隊に気軽に話すとは、これはえらい違いだなと思った次第である。

貨車の積み下ろし、砂糖大根の貨車下ろし、汽車工場、石鹼工場、都会的な作業だったからどうやら死なずに済んだが、話に聞く伐採や鉄道の敷設、または炭鉱の作業だったら、東京の人間である私ではとうにシベリアの土になっていたかも知れない。「人間万事塞翁が馬」振り返って見ればよくもまあ生きたものだといふに思ふのである。

中国に対する戦犯の調査が間もなく始まり、シベリアより中国に引き渡されて、人によっては十年も留め置かされたと聞く。もちろん師団長も旅団長も戦犯で

ある。大体我が師団は沖繩に行くよう既に命令が出ていたが、あまりに中国に深入りして速やかには足抜けできないということで、そのかわりに中国の他の師団が派遣され、そして全滅の憂き目を見たのである。なんとまあ軍隊とは運隊なんだなあとつくづく思うことである。

シベリアにおける電話線工事

東京都 岩 淵 鉄 夫

私は当時、電気通信工業学校に通学しておりましたが、昭和二十年に徴兵検査が一年繰り上げとなり、二月に満州牡丹江電信第十七連隊に入隊。六カ月で停戦となり、武装解除でソ連軍の捕虜となり、「東京ダモイ」の名のもとに貨物列車に乗せられてバイカル湖畔のイルクーツクに降ろされました。ここでシャワーを浴び、辿り着いたところはタイセット。間もなく知らぬ者同士が呼び出され石岡班長のもとに通信隊が結成

され、これより移動用のバラックを持って收容所外生活に入りました。

タイセツト地区間一〇〇キロメートルが受け持ち区域とのこと、ロシア人タバリシ・デンニカ、タバリシ・サマロードフの両監督のもとに、歩哨なしの電話線架設工事が始まりました。電柱を立てるためにバーム鉄道沿いに幅十メートル程の空間を作るための伐採でした。

電柱用の木を切って、皮を剥ぎ腕木の穴を開け電柱（当時は木を使用。一本の高さが約十メートルで地上八メートル）を作る者、電柱用の穴（三十五センチメートル角で深さが一・五メートル）を掘る者に分かれ、穴掘りは、五十センチメートル下は凍っているため焚火をして掘ったものでした。初めは大変でしたが、約三カ月程過ぎました頃には、ロシア語も監督が現場で弁証法的に親切丁寧に教えてくれ、一番先に覚ええたのが「マイナス四十二度」。すぐ寒くなりましたので、マイナス四十二度になりますと全部作業は中止となります。電柱の配列ですけれども、三十メー

トル間隔で各コーナーには逆Y型のウーゴロ（曲線用）が付きますが、これを作る同志（大工さん）は非常に器用で、巧みにウーゴロを作るため、監督は非常に大切にしておりました。

次に、一日の仕事の一部ですが、朝九時三十分頃に監督が来まして、全員が今日の作業の指示を受けます。

私の仕事はほとんど電柱に登り腕木を付け、ボルトで締め付けて電話線を磚子にジョイントすることでした。電柱に登るのも初めてのためなかなかできず、やっと登っても上になるにつれて細くなっており、昇降機の爪が木に刺さらず上から滑り落ちたことも度々あり、これを監督が見ており、叱るところか自分が手真似足真似で根気よくできるまで教えてくれましたし、私もなにくそと頑張りました。

この仕事が終わる頃になりますと、午後三時三十分くらいとなり、監督が来ており、「仕事が終わったか？」と問われますので、「ただ今終わりました」と報告しますと「良い、帰って休みなさい」、あるいは

「寝なさい」との返事が返ってきます。それから時間と休みの日には、農家の畑に行き、掘り残しの馬鈴薯を掘りに行きました。途中で歩哨に会い、「私は通信隊でこれから馬鈴薯を掘りに行くのですよ」と言いますと「早く行きなさい」と言われ、早速掘りに行き、無料ですので袋にたくさん掘ってきました、飯盒で炊き、よもぎを入れ、砂糖を混ぜ、一〇分ほど搗ぎますと草餅のようになりますので、味わいながら食べました。とても美味しいのです。

現地の気候ですが、夏と冬しかなく、夏は午前三時頃より明るくなり、やがて太陽が出て日中は酷暑となり（木の陰に入れば涼しいのですが）、午後十時頃にやっと暗くなります。冬は酷寒となり、午前十時頃に明るくなり午後三時頃より暗くなりました。温度も空気が乾燥しており、マイナス六十度まで体験いたしましたが、マイナス四十度を過ぎると手先などは痛くなり、放っておくとすぐに白くなり凍傷になります。室内で夕方天井がもやもやとなってきましたと翌朝はマイナス六十度ほどになり、作業は総て中止となりました。

た。

電話線の内一本だけ銅線がありましたが、これがモスクワからの直通電話線とか。（監督からの話）

後でわかったことですが、私達以外の方達は路盤工事等が厳しく、体力を消耗された方がおり大変ご苦労されました様子、通信隊は敗戦の幸運児といわれそうです。

現地は凍土で、地下五十センチメートルくらいまでは軟らかでその下部は凍っており、従って木の根も下まで伸びず、五十センチメートルくらいのところより横に生えておりますので、台風や暴風などには弱くすぐ倒れてしまいます。そのため一度木が倒れ、古い電話線が切れ通話不能のため緊急工事に出動しました。日本人は徹夜作業は禁じられておりましたが途中でやめるわけにはいかず徹夜になりまして、工事が終わりましたのは翌日の朝でした。早速電話で第三中継所を呼出しますと、やがて交換嬢がきますので、「私は、通信隊の岩渕ですけれども、ただ今電話線工事が無事終わりましたので、帰って休みますのでどうぞ監督に

お知らせして下さい」と伝え、交換嬢より「徹夜作業も終わりで難うございました。監督に連絡しておきますからどうぞ帰ってお休み下さい」との返事。また、古い電話線の補修で、高さ三メートル弱の電柱に一日に約四十本も登り作業をしたこともございます。

私は当時若かったのと、この監督のためならと仕事に全力を投入いたしましたが、そのためでしょうか、グループの中で私と前記の同志は、監督に折を見ては家に連れて行かれまして、マダムの手伝いをしながら手料理を作ってくれまして、帰りにはフレーブや食べ物を持たせてくれました。監督とマダム共々親身になってとても良く面倒を見てくれました。現在お元気でしたらは非現地に行きまして当時のお礼を申し上げます。気持ちでございます。現地の通信隊の方は、皆さん言葉も丁寧で、態度も私達にはとても親切でした。シベリアの仕事では、この通信隊の仕事はノルマが高く、平均が一三〇%ですので監督も常日頃大変に喜んでおられました。監督より「ロシア語を書けますか」と問われ、「私は書けません」と答えますと、残

念そうなお顔をしておられました。

この記事は、昭和二十年九月より二十四年七月までタイセット地区において現地のロシア人の監督のもとに電話線工事をした当時の記録の一部でございます。残念ながら現場の厳しい条件の中では筆記や写真等は毛頭なく、頭の記録に頼るだけでございます。

昭和二十四年七月二十四日にナホトカより恵山丸にて舞鶴港に上陸し、復員しました。

シベリアといえぱとかく酷寒の中で残酷で強制労働の嫌な話ばかりですが、実際に私が体験しました心温まることを書き、厳しい中にもこんな一面もあったことをお知らせしたいと思い、ワープロのキーを叩きました。

こんな一面もありました。私達のグループがナホトカでロシア人の中尉がいる傍らで、どうせわからないだろうと思ひ散々とロシアの悪口を言いましたところ、突然に中尉が「君達そんなことを言つてよいのか」と日本語で言うのです。途端全員が青くなつて逃げてしまいました。帰国間近のにまた奥の方に連れ

て行かれてはたまらないからです。

食事は主としてボミの粉末と高粱の粉末を混ぜて糊状の物を固くした物とフレーブを常食として、米は一年に一回くらいで碎けた米だけでした。生ニシンの味も忘れることができません。

電気、水道、ガス、新聞等もなく、在ソ中は一般のロシア人と接触する機会もなく、従って残念ながら話をすることもできませんでした。

砂漠の中にニュータウン

石川県 安本千秋

私は、明治四十二（一九〇九）年奥能登の輪島に生まれた。父は医者と神主が兼業という変わり種で、私も幼時から祝詞を口ずさんだり、笛を吹いていた。

輪島中学から東洋大学に入り、神道の研修も受けて神職の資格を得て帰郷した。親戚の安本家を継いで門前町の諸岡比古神社を主に、兼務神社三十一社の宮司

となったが、社はどこもかしこも荒れていた。折から日中戦争、大東亜戦争となつて、出征兵士の武運長久の祈願は引きも切らず、参詣者も足しげくなって、社殿の修復、鳥居、石灯籠なども復旧することができた。

昭和十八年の暮れ、遂に私にも召集が来て、出征した先は北支の邯鄲。訓練もそこそこに北支の討伐作戦に参加、独立旅団の助っ人大隊として東奔西走した。終戦は満州の公主嶺の山中。ソ連軍の指揮下に入つて黒河からブラゴエに。満州から略奪された物資の山、その運搬と貨車積みにかき使われた後、貨車に詰め込まれて西へ西へと約一カ月の旅。着いた所は世界一の大湖といわれるカスピ海に臨んだクラスノボドスクという砂漠の中の街であった。酷寒のブラゴエとは正反對の酷暑の地での抑留生活。住まいは地下壕の中の多段式ベッドに押し合つて南京虫に攻められた。

労働の内容は、後でわかったのだが、砂漠の中のオイル・ニュータウンの建設で、この小さなトルクメン共和国は、対岸のアゼルバイジャン共和国とともに